

曲亭馬琴
八文字舍自共
山東京傳
江島其磧
風來山人
十返舎一九
近松門左衛門
近松半二
竹田山雲
為永太郎撰
並木宗輔
西澤一風

吉田香雨編纂

小説文竹軒

大善堂發兌

本間文庫

文庫 14

D 26

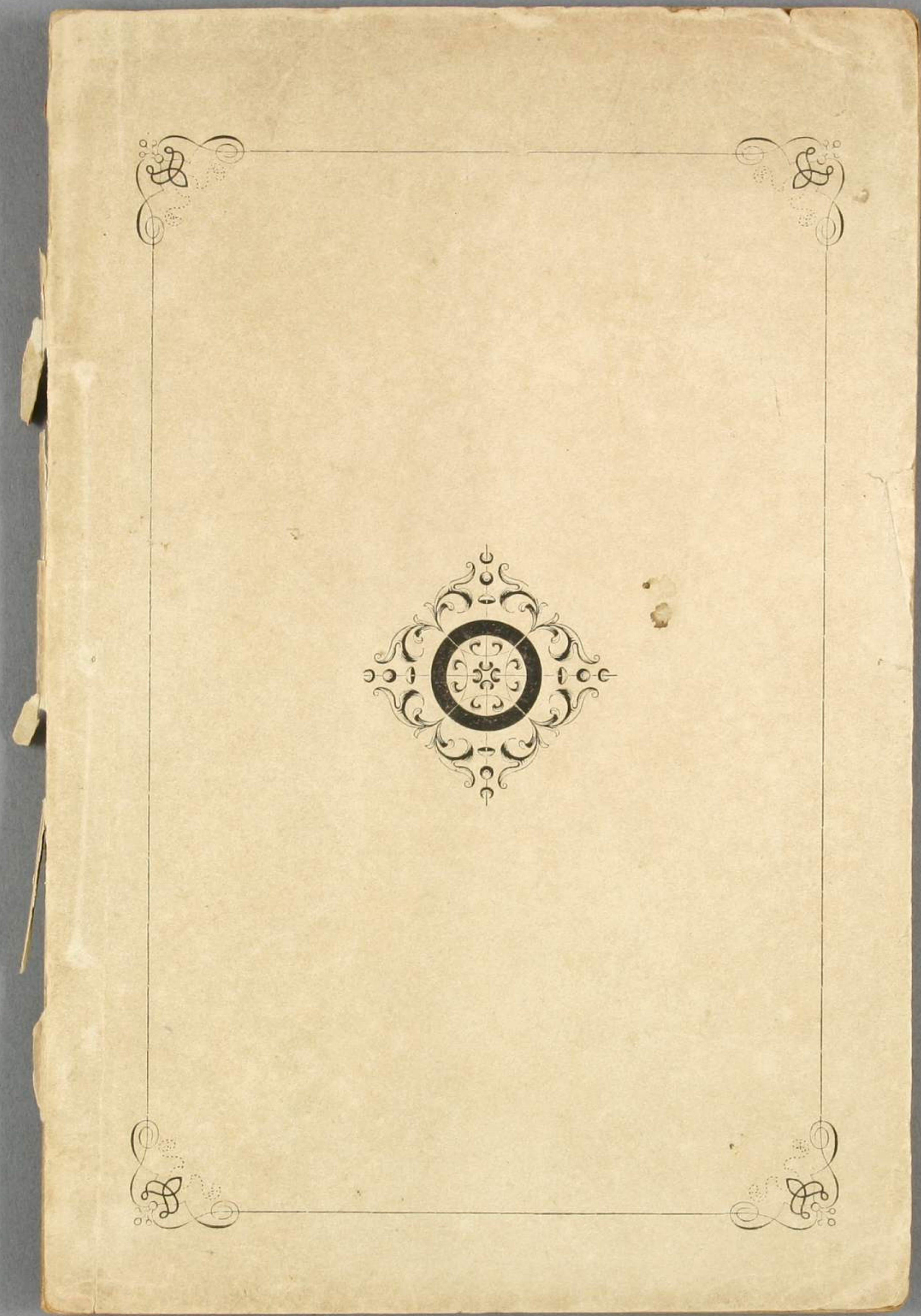
95

90

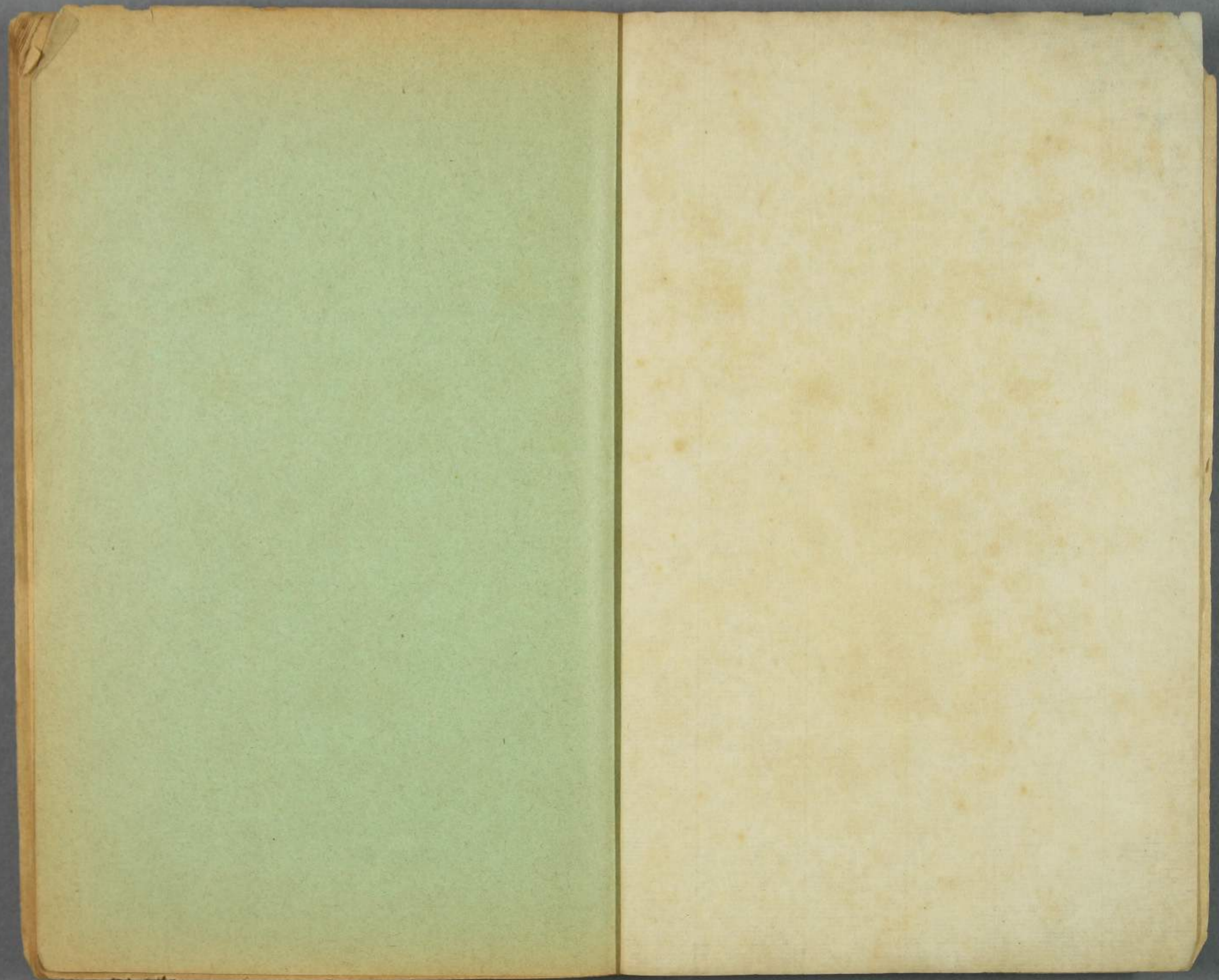
85

80





5
文庫14
D26



○小説文範代自序
 小説ハ誰彼にも作り得らるべき物のごとく見えて
 その實面倒なるものぞかし幾らかくらの學文に通
 じいかの世才に長たればとて強ちに善くすべき業
 にあらざ西洋の「スコット」我國の馬琴なんどあまた
 巧妙なる小説を著はして其名を世々傳へしハ誠
 に希世の天才とやいはん然はあれども近頃此道漸
 次々進み或ハ文學の科なりとも稱へ或は美術の
 一門なりとも言もて囃し繪畫音樂彫刻と並び稱せ
 らるゝに至りしより我々他も心を小説の一途に傾

ふけその念凝りて更に自から作者たらんと欲す
る人も多しとぞ世の中の流行ほど面白きものハ
らじ此姿にて過行んハ百の「ツッケンス」
と出すも遠きハあらざるべく千の京傳風來のい
で來るも遅き事にハあらざるべし兎にも角も文
學進歩の兆こ瘳誠に目出たき事にハ己れ今更の
流行を當込んとばあらねども常に小説を好むの
癖あり一年病の床に在りて徒然なるまゝに古人の
物せし小説のたぐひを何くれとなく見散したる中
よて心に感じたる節々を一ツ二ツと摘取て反古の

裏に書留め置きしに早晩積りて一束とハなりぬ頃
日洋燈掃除に反古少しいりぬと小厮の請求むるに
任せ破れ葛籠の蓋とり除けて瘳まはかとなく取調
べしよふと件の反古の出來りしにぞ又今更に珍ら
しき心地せられて一たり之れを讀みしに其妙實
に言ふべあらば斯る尊とき言の葉を無下にうちす
て枯さんハ最惜きとぞなりと獨り呟やく其折しを
店頭へ來りし客人の何か小説の材料ともなるべき
書ハおきや尋ね玉ぬあるたぐ之れを活版に
付さば小説流行の今日に小補なしやせいひがたし



自笑
其積

京傳

即ち出版の手順に及びぬ但し此書の齧頭は
 作者の名ハ曩ヨ書留め置かざりし此度看官の便
 宜をはり己が記憶の存するまゝを大方ハ記載し
 置たれども固ヨ空覺に乃事にしければ中ハ誤
 して其名を付違へたる向もやあらん其ハ宜にみ
 そなはせ給ひてよしや小説乃材料著作ハ参考
 宜にハ往るぞや秋夜長徒然を慰さむる便
 宜也をなし給ハらば編者此上なれ幸ひになん
 戊子晩秋
 大華堂のゐるじ
 吉田香雨誌

序ノ四

小説文範

吉田香雨 編集

○好こそ物の上手なりとて親好きの孝行の名を上げ主好は忠臣の名
 を残す是等の好の積むことを厭はず其餘の事は好なりとて心をゆる
 す時は害を爲すこと少なからず食は体を養ふ物にして過る時は命
 を損なひ酒の愁をはらふといへども内損の愁は飲なぬさきの愁にま
 されり火事が怖いとて一日も火を焚ずしては逗留のならぬ浮世なれ
 バ兎角得失のみな其用ふる所にありと知るべし芝居も勸善懲惡の心
 にて見る時は教ともなり戒めともなれども是又溺る、時は其害少な
 からず」

○頃しも彌生の初めに堅田に落る雁金もこ、ちに歸る時なるに比
 良の高嶺の雪下し餘寒を増して肌寒く瀬田に傾ふく日のかげも西方
 淨土と思ふら幸崎の松風も常樂我淨ときこめり栗津の嵐を世の

中の生者必滅と観すれば矢早の船も人の身の會者定離とぞ思はる、石山の月三井の鐘生死長夜の夢の世を悟れる人か外の方に鉦の音念佛の聲いとも殊勝に聞えけり」

一九

○是はしたりや五たりや先づ昨日はいらい御馳走お禮はお出會の節と存じふところに入れ只今お目にかゝりしゆる温もりの冷ぬうちずますと口合ひたらしく」

馬琴

○吾妹子が寐くれた髪と詠じけん猿澤の池にはあらで沈み果たる身を啣つおのが過世ぞあし曳の大和國高市郡」

自笑

○長者町にも其日を過ぎかぬる者あり武者小路にも至極のよわみそ住み富小路に貧なる鉢ばい柳の馬場に腰の太き土物の女しやらめき錦の小路につれ着たる働き人醒が井によたんば黒門通りに白ぬめの織屋名は頼むべきにしもあらず」

其積

同上

○遊里に赴かざるは女郎を買はざるの堪忍なり女郎を買はざるは色慾におぼれざるの堪忍なり唐土の韓信が堪忍せし股倉には異なれども何れこの穴這入をする者は家を傾け身を害なふを前車の誠め百も承知二百も合点と言ひながら兎角堪忍のならざるは此道にして迷ひの雲に本然の大道を失なひか先眞ッ暗となりては明るき道に出るを木茸の看板掛し聾の耳よりも遠しとかや」

人名不詳

○大盡を敬ふ仲の丁の茶屋あれば素見を喜ぶ田町の居酒屋あり見之にかさす扇借金を恐る、頬冠り迎に行く木乃伊連れて戻る鮎おのがさまく往さ來るさの絶間なき賑ひは夜を晝なる別世界仙境とも謂ひつべし」

九一

○神は正直の頭に宿り玉へば佛の決定往生とて尻の穴に心を通はせ玉ふ神佛一休兩部とは高野大師れ口車所詮極樂と高天原は京と大坂

京傳

の違ひにてどちらへ往ても歡樂の都なるべし」
 ○地水風火の四ッの緒の切れて果敢なき琵琶法師も忠孝全き竹杖にて煩惱の犬を打ち畜生道をまぬかれて天堂に生る、かたち子息文彌どの、姿繪とも見玉へかし緑青の髪すぢ胡蝶の肌無常の風に塗笠も骨のみ残る手弱女が肩にかたげし一枝は紫雲たなびく藤の花これ妹藤波が成佛の姿なり積悪の角を折り鬼なす心をひるがへして墨の衣に釘うつさまは是乃ち長谷部雲六が邪念を滅せし姿ならずや喜怒哀樂に色とりてもろくの形をなし善となり悪となり正となり邪となり恩となり仇となるも三世因果の報いと思へば互に恨みもつき弓の矢猛心をやはらげて唯彼等が菩提をどむらふにしかじ」
 ○曾子は飴を見て老を養はん事を思ひ盜跖は是を見て錠をわけん事を思ふ下戸は萩を見てぼだ餅を思ひ齒なしは淺漬を見て菘菜卸を思

風來

自笑

ふも皆人々の好きどころへ情の移るがゆるなり」
 ○紅粉翠黛は薄皮をいろどる男女の淫樂は互ひに臭骸を懐くと東坡居士のすぬぶん穢なまれけれども生を受けて灰に成るまで色に身をうつ輩古へ今において其數限りなし三千世界を見開らさ何事も合点どうなづいたる悟道人も女の白き脛を見ては佛の事も地獄の事も忘れはて、」

馬琴

其 自 磧 笑

○男風流の二の町なれども第一によく拵で小遣ひ錢に事缺せず第二には朝起して飲焚おろして家々を起す第三には水を汲み濯洗衣の手傳ひする夫にすれば得用向き」
 ○商人は遊女のごとく心を持たでは今時口は過されず勤め女は商賣どて朝夕風俗を作り顔を磨き心に合ぬ事にも笑ひをつくり數万の同じからぬ氣を夫々に取りて世を渡ることぞかし商人もその如く内證

馬琴

六
 に腹の立つ事が有らふとも顔付をにこやかに拵らへ賣物を安く付け
 てけなす者にもむつと氣な振を見せず上手を言ふて面白可笑う賣付
 るが商内上手といへり武士方出家衆町人百姓それくの氣に應ずる
 やうに持て参りまづかなる物に度々足を運ばすとも少しもふしやう
 らしき顔をせず心長く仕似せれば自づから看板出せし處にも」
 ○思ひくしたる櫛疊紙涙もてどく白粉も泣顔かくす薄化粧憂とつ
 げの毛筋立今ぞ流れてもく水櫛に髪のおくれ毛拵付ても亂れて物を
 思ふめり折しも隣れる小家の二階に誰が手すすさみの三味せんも外の
 哀れをしのびごま生憎たへに唄ふを聞けば
 「捨る身を何樂みの化粧わかれの櫛のはかなくも通り過ぎたる夏
 の雨くもるは鏡の咎ならで胸の煙りを蚊やり草
 同樹は椽に偏袒ぎてあふぐ火鉢の燃たつをた、けば頓て消易き人の

風來

命は翌日知らなくに
 「もふべのまゝの黛も薄き縁しと尺長にむすぶの神の顔面憎やよく
 や我からねに癩つけてやるかたぞなき油手を拭ふちからもなよ竹
 の指さへ細るうき身かな」
 ○此人先の菊之丞が實生にあらかねの土の中より掘出したる根分
 なるが二葉の時よりも生立野菊の類あらずと評判は高作り器量は
 外に並び夏菊ともてはやされ」

自笑

○天明曆に曰く北忠が膝を揺る癩も蝶花が贅言に如すとかや祇園妾
 舎の姉の聲諸業無性の響ありしやらくさい異見は今時はやらす」
 ○霖雨のふり續きて俄かに照り上りたる跡なれば暑はいつよりも強
 く風見は作り付たるがどく草は晝けるに似たり道行く人は汗とな
 りて消なんかと苦しみ犬の舌は解けて落んかと疑ふ人々暑を避んて

風來

とを而已計りけり」

京傳

○小野の小町家の巨萬の富をなし容らひ三千の美にまざるといへども若うして双親兄弟を失なひ老て子孫親戚なし紅顔も垢面と變じ玉体も瘦身とかはりつひに丐驅となりて路頭に臥すおもふに古へより世に勝れざる佳人にて終身の榮花を保つもの稀なり昭君色三千を奪ふといへども塞外の塵を免る、事あたはず揚妃寵一國は高けれども馬嵬の外を逃れがたし造物の盈るを思ひ都てみなかくのごとし彩雲は散じ易く美器は碎けやすき理り如何ともすべからず」

其 自 笑

○惣じて傾城と地女と別に變つた事もなければ第一氣が鈍で噓突く事が下手で物がくどふて賤しい處があつて券の書やうが違ふて酒の飲振りが初心で泣いた時にはろりと泪がこぼされいで歌三味線がならいで衣裳付が取ひろげで立居があふなふて道中が腰がぶらくして

馬 琴

床で味噌鹽のこと言出して倍氣が強ふて口説といふと摺小鉢打破つて始末で鼻紙壹枚ツ、遣ふて伽羅は香藥のやうに思ふて萬に氣のつまる計り髪かしらは大方似たものなれど一ツ口にいふも愚かなるせんさく」

同 上

○夫れ渴する者水を求むるに水を得て飽く時は更に湯を求め湯を得て飽く時は酒を思ふ是れ人慾の憤みがたき處なれば」
○かの小町のうたひし如く人の心は花色にてうつろひ易き世のならひ况て色よきいな船の否みかぬるもならばじとてつひに浮寐の涙まくら後には楫をたえぬともこがれこがる、操にのふり捨がたき戀衣のたもて崩る、ばかりどの後又ぞ思ひ知られける」

自 笑

○惣体出過たものは悪ろし料理人の八兵衛が額ひも遣り人のかめが尻も賣物でなければ同じくは並がよし」

自笑
其積

人名
不詳

馬琴

自笑
其積

○世間の若い息子の錢遣のせして律義に金まうける事を知らぬと間夫狂ひせむにありべか、りに勤める女郎とは盗みはせぬと鼠取らぬ猫のごとし間夫を拵らへ手管して逢ふ女郎にはやらぬなし都て女郎の氣寛潤にていたづらなるこそ面白けれ

○辨慶と稱すあながち脊中に七ツ道具もかざらず手に大長刀も携へねと判官殿のお髭の塵取り静御前の文の取次暑氣見舞の扇箱寒氣見舞の鶏卵かご棚に絶る事なし

○糸の岩橋なかたえてよるの契りも遠ざかりいなさ、はらそよとたゞ又音信なければ

○劍を撫て疾視て曰く彼何ぞ敢て我々當らん哉此匹夫の勇一人に敵する者なり文王武王の大勇は般の亂を平らげ無道を誅し仁政を行ひて天下を平かにする是れ百千億万人に對する大勇楚の項羽が勇力は

同上

同上

人名
不詳

一人に敵對する匹夫の小勇漢高祖は沛縣の土民より起つて王位に登り四百年の基を起す是を至極の大勇といふならん

○南枝は暖に向ひ北枝は寒し一種の春風雨般ある花の香をしたひて梅の浪華のうら珍らしき初鶯の聲を揃へて節をこめたる

○魚は水中に游ひて水を見ず人は氣中にあつて氣を見ず實に粹は粹中に溺れて粹を知らざるこそ多し

○娘も今は通る、道なく心よそくも其儘に怪しき契りを結びけり兎角する間に日も暮たればいざと許りに立出る此世の名殘ぞ惜まれて

空も時雨の降り誘ひ溢るたもとに女房が是さ、れよと差出す相生傘の二人連れ馬道過ぎて山谷橋淺第ヶ原と聞くからに淺き契りも張ぞ

なき縁の橋場の渡し船越行く先は覺束な誰しら髭と忍ぶ身ハ追人や來ると草木にも心置かれて邊りを見れど只深々と更る夜の文目も分

同上

自笑 其積

ぬ墨田堤柳の本に立寄れば無常を誘ふ鐘の音は浅草寺の八ツ七ツむつみし事も夢一ト夜人目にか、らぬ其中にと二人の覺悟の短刀ひき抜き南無あみだぶつと唱ふる聲の洩聞えてや法性寺の門番窓をひし開き」

○蜈蚣は毒虫なれども毘沙門の使はしめにして福をあたへ玉ふ媒と聞て敬ひ蛇はいやらしき物なれども辨天の愛し玉ふと云ふゆるこわくながら懇ろになり度き慾の世の中に」

○忠臣二君に任へず貞女兩夫にまみえず石臼箬にもさ、れねば豆腐わらにても繋ぎがたし日月は天に位し草木の地に生じて昔も今も變つた事はなき筈なれども」

○天王の劍宰相の劍の既に活りぬ今一ふり元帥の劍あり是を活み人先生ならでと張良の文作に乗せられて韓信是は迷惑となめらはれしが西蜀への通り札を貰ひて竟に漢家四百年の基を起せしは子房の目利の外れぬ所なんぞ方寸の器物を見極めたりとて目利者とはいふべからず」

同上

風來

自笑 其積

○行川の流れば絶ずしてしかも元の水にあらむと鴨の長命が筆のすさみ硯の海の深さに残る隅田川の流れ清らかにして」

○俳優の舟遊びに三絃淨留里を翫そふは學者の書を講じ出家の經を讀み米搗の杵をかつぎ大工の手斧と腰にさして花見遊山に出るがどとくなればとて」

○定めなき世とは人ごとにいへども世の定めなきよりの只定めなき人の心にぞありける古人春宵一刻價千金とめつたに高ばれば又浮世を三分五厘と捨賣する男もあり然れども春宵一刻に千金出して買ふた譯もなく三分五厘に賣てしまふ出來合の浮世もなしにかに口

から地代の出ぬものなればとて出る儘のいひたい事つまる處は能くも悪るくも云ひなし次第の浮世にて浮世の定めなきは人の心の定めなきなり

京傳

○春過ぎ秋來れども進みがたきは出離の道月を見花を惜みても起り易きは妄念なり罪障の山には煩惱の雲わつうして佛日の光りはれがたく生死の海に無明の浪あらくして眞如の月宿らむ

馬琴

○こひも願ひし婚姻のその盃は手向の水三々九品の淨土にて墨の衣の色直し蓮の臺を玉の床憑むは後世の縁しのみ補二郎ぬしを先だて誰をよるべに存命んど口説もあへず刃物を取つて胸上より刀尖脊へ突出し忽地撲地も俯すほど又鮮血はさつと瀆り下に折敷く夏草を秋の錦どそめなしたり

○注文は枕掛しだい兎唇鼻欠の男撰み無し下の關の大船頭熊野の鯨

人名

突阿波の蓋玉屋諸國の名物をひき受ての大商内日本國が一ツ所へ寄るやうな事をしては大金をまうけ

不詳

○勇士と傾城どの各別の違ひなれども心いきり同じと例へば侍の義といふの女郎の契約を違へぬ心中仁といふの情計畧といふは手管主人に忠を尽せば出世立身をする客の心によく合ふやうに勤めれば身請せられ奥様になる事ぞかし

自笑

○狙豆をつらね禮容を設くるの聖人のをさな遊びなるに草履かくれんばのぬすみの稽古かけ落の修禮なるべし

其積

○世の中に狼の齒を療治すると盗人の渡世ほど危ない物のあるまじ命をまじに掛けて當るものを幸ひにたい取商賣今もしれぬ身とは思ひながら日比の積悪身をせめて三界廣しといへども一身を置くに所なく野に伏し山に隠れ一日暮しの盗人わざ食ぬがかなしく

同上

同上

○妻の見るにも得も堪ず仇にかけたる千行の涙何といは越す昔清水
涌かへるにぞ堰あへぬ人の子のうへ我子のうへ聚も集會ひし因果ど
ち仇となり仇となす皆な前世の悪業と思へど思ひやるせなきけぶり
の闇に煩惱のやけの、雉と身を焦し泣まどふ妻に目もろけず苦痛さ
せじと春澄が臨終す、ひる唱名と共に閃めく刃の下に稻城の首の落
てけり」

○書贈りし玉章は數の羊の腹にも満ち牛の車に積てんばかりさいな
れど」

○黄金の釜の堀出し今の世にのなかりき富貴にしても苦みあり貧賤
にしても樂みあり一切の人間應せぬ分限を願ひ身を滅ぼす例し其數
を知らず」

○香餌のもとには懸魚あり重賞の家には死夫ありといへばずぬぶん
下人に仕着せもよくして着せ時々心着もして懸るに目を懸けて取ら
せば自然から恩を思ふて身と惜ます働くものあり」

○都なれや東山を庭前の築山になし泉水は鴨川の流れ潔ぎよく鳥屋
の鴈鴨群集て遊び二階の雨戸明けさせて煙管啞へて見渡したる朝氣
色雲より上に叡山の頂ばかり見えし先斗町の貸座敷に」

○知俱河泊の細石千々に碎くる思ひ寐の寐醒の床のうつ、にも其面
影のさへざりて伏屋に生ふるは、きいのありどは見れど逢はれねば
相初川の名のみにて過世むすぶの神もなく浦見の山のうらみとびて
袖の泪の園原や木藪にみかく白露の玉章の數も積りければ廣惣も遺
情によはる心にや谷の梢を蜘蛛にてちらぬ花踏む棧の危ふき事も忘
れつ、保屋の薄に招かれて會地の關のさびしきもひまを窺ふ諏訪の
湖氷の上の通ひ路も度重なりてうち解ぬれば岐蘇のあさ衣あさくの

人名
不詳

み染て止むべきかはどいふ心いで来て」
○花を流すの吉野川紅葉流すは立田川出家流すの衣川比丘尼流すの
天の川若衆流すは尻無川」

一九

○南無金比羅大權現私へ長いのを授け玉へ其代り嫌いな物の一生斷
ちますとの願ごめイヤ我等の嚴嶋の辨天さま百八燈の愚かもつと海
へ回廊の建繼し唐銅の燈籠七八千石鳥居も一萬ばかり繪馬にかいて
あげませう何とぞ長い圍を取らしめ玉へ」

自笑

○サア〜是のお煙草盆汲で来いお茶奇麗に掃除してお盆早うとい
ふて遣れ噂御挨拶娘の何處にぢや又手水かテモ長い雪隠寐ては居ぬ
か起して来い早く〜と俄にてん〜舞の馳走ぶり」

同上

○高き屋に登りて見れば瓦焼くなる大阪の上町邊高原といへるに神
といまりて石の上古太夫といふ神道者ありけり」

風來

○寄る年のひき道具には拍子の合圖もいらすそろ〜彼世へせし出
し道具蓮の座へ早替りしてより」

京傳

○小野篁地獄に往來せしといふも鳥部野の事なりとぞされ亡人の
しるしの石あまた立ならびて昔蒸したるもあり新らしきもあり無常
遷流して送らざる日もなければ末の露本の車おくれ先立つ煙常々絶
ゆることなし」

風來

○筒の中から飛出る玉屋が手際闇夜の錠を明ける鍵屋が趣向」
○彼にならその枕を重ね生ての契りは六十一の本野返りを十度まで
どかため死ては九品の蓮臺に十劫の溢れをたがへじと約束し連理同
穴の契りを立る既に三年の久しき」

一九

自笑

○色と情の堺の浦花に増りの櫻鯛あかぬかたみに今日やひくらんと
爲家卿の詠れたる」

同上

○周公旦は文王の子武王の弟たりしかども髪を洗ふ時訴訟人來れば髪を握つてあひ飯を食する時來客來れば嘔を吐て對面し玉ひけり彼奴禮義を知らば誓をさかさまにしても出向ひ袴の腰をむすびくも急ぎてこそ對面すべきに」

馬琴

○お染は今茲十五にて含める花の露濃やかに春の旭又向ふがごとくいざよふ月の雲を出て秋の夕を照らすに似たり」

自笑

○人の騒ぎを見て歩行くは月夜に提灯のいらぬと同じ道理にて見らる、者も思にさせず見る者の心遣ひもなく然とは又宜い樂みなり」

一九

○飛鳥川の淵瀬は田樂返しの如く人の心は濕皮癬にひとしく移りやすきぞ淺はかなれ」

同上

○質の流れと人の行未定まらぬは商賣の利上げに疎く借り過したる報いとは今こそしるき陽太郎が」

不人
詳名

○唐土の花容は美しけれども飛だきもの太き女陽虎は盗人なれども人相の能き男にして心形に依らざる事しみたれし破れ衣物ひつ張りし福の神あれば當世模様着飾りたる貧報神あるが如し」

自笑

○加茂川へ釣を垂る、と戀の取持はよほど氣の長い者のする事なれども石をかみわり火を握るみせものさへあれは何がなるまいものども言はれず」

其磧

一九

○跡を曳く三味線もちつくりかぢり習ひ鼓もた、き覺え太鼓もくらはせ茶の湯も飲かけ花も突込み俳諧狂歌の門にも付合ひ段々と豊年打續き鼻毛の穂に穂咲きて親の物は子の物と」

同上

○互ひに相思ふ中は離れじと漆紅葉添る、龍田川の鴛鴦を學び癩病やみたる牛の小便はとさも長たらしき行末の事ども宿老五人組の加判せぬばかりに堅く契りてありけるが」

馬琴

○錦を贈りて情を述べ立田山を詠じて想ひを遣るこれをしも尙ほ淫
れたりといはんや上總の玉名が身を投めたる大磯の虎が尼となりた
る

人名

○元來お茶屋といふもの歴々とした爺がありながら噂の名を行燈に
書付け牝鶏の朝するとは此里になき文句にてッリヤお客じやといへ
ば爺の何處へやら隠れてしまふ

自笑

○櫻見て紅葉亦た捨がたく月の出しは雪のあけぼの何れか詠めに優
劣なく紅粉を以て顔をみがき衣裳に美を尽して形ちを作る女に目を
悦ばしめ席を同じうして樂むもあれバ

風來

○涎たらしめて見て居る亭主の鼻毛三千丈たわけに依て斯の如く長し
と李白に見せたら詩にも作りさうな親玉も世に多し

不詳名

○耆婆扁鵲の薬よりまはりの早い人の身の疾ひにしるし有馬山薬師

馬琴

如來の方便の慈悲の温泉靈湯に入り來る人は絶間なき

○けふは越後の人の月あすはいづくの人の花さてもうたての娑婆世
界おもふてたびね白糸の昔が増じやなかくに染てしんくの糸のも
つれの物おもひ

自笑

○桓山に鳥子を四ッ産めり羽翼漸やく生ひ揃ひて四方へ別れて飛ぶ
とき其父母鳥悲しみ鳴くを四鳥の別れと言へり

一九

○是は早速恭けあり御恩は死だら忘れませ其代り限月には屹度返濟
も覺束なし生た人への香奠と思召て下さりませ

同上

○何某が發言に心得たんばのひいな草开處等は我々取て置の智慧袋
物まへの入用にどくすね置しをさらけ出し一工夫仕らんと

自笑

○翼なうしてよく翔り足なくして行ものは正に孔方の力なり然れば
位尊きも錢多きに若す利の爲にハ義を忘れ慾に引れて徳を損す

同上

○粟一石を食ふ駿足も見る人なければ奴隸の人の手に辱しめられ大津馬の追がらしとなりて練にだも飽く事なし

一九

○貧福のまはり合せは其年の當り外れ煮て固めたる事のなき世の中は塞がつてある雪隠のどくうんを待つにはしくべからず

馬琴

○夫流竭て飲を求むるものは新たに井を穿にしかず月没て明を求むるものは更に燭を点するにしかず

自笑

○盃も數重なり飲倒れてハヤ射をかき出すわれば酌する女の首筋へからみ付きて放れぬあり又は床柱に凭れ山寺唄ふ此方にハ銚子かへて來りし小女郎とらへて不理屈を言出して喚くもあり斯る亂軍の中を見すまして

風來

○蚊帳はみどり湯具は紅の鐵砲あれば据風呂もあり男あれば山姥もあり

自笑

○夜を所作の遊び所も深更に及んでは禿も酌しながら居ねぶり我知らず船を漕ぎ引舟女郎も欠びくろめて宵からの酒がお迎ひに來て後

其磧

ちは高軒かきて臺所には粗板の音たえて今は外に聞く人もなしと

同上

○惣じて若後家のうつくしさと風吹の林檎とは落そめては堪らぬものにて本夫又別れし二三年は

不人
詳名

○春の山は煙雲聯綿て笑ふが如く夏の山は蒼翠たる嘉木繫陰て滴たるが如く秋の山は明淨控落にして粧ふが如く冬の山は慘淡にして睡るがごとし春は二葉を生じ秋は紅葉す夏は急雨を帯び冬は雪をいたいく

馬琴

○實に霜雪に壓せらる、松栢は却つて節操の高きを顯はし疾風に吹

風來

○糸の仙人湯屋の三介を羨めば三介又娼家の湯焼を嫉なん砂糖屋の

自笑 其積

小厮甘きをきらい鱧屋の猫香しきを好まざるべし

○夫れ醫は生を司どるの職分諸藝の上もりにして仁心まつたかるべき者なり萬病は大きなこと一病に妙を得ても諸人の助けとなる

○堀川の館は源家れ古へ室町の館は足利の昔しその館には引換て祇園町のかた傍りにお○といへる唄妓のやかたの

一九

○都の人ハ吾妻の方へ逃走の足を爪立吾妻の人は津輕松前に夜抜けのわらんじをはきもあへず踏む足しごろに逃げうろたへ

自笑

○佛のさたの僧が知る病ひは醫師歌は公家弓矢の道は武士が知る遊女とても其如し夫者ならでは其味を知らず見ると聞くとは雲泥抜群の違ひありその上色町の事は甘い物やら辛い物やらういもく知らぬ未だ青柿のへたげなき貴様の口から

馬琴

○顔色の艶妖なるを猜みてハ月も忽ち雲又隠れ容姿の匂ひやかなる

同上

にけおされては花も羞らふ風情なれば

○苦しきものは恩愛の絆にこそと禁めあへぬ涙に胸のいた庇しのぶに餘る玉水やもろしぐれする全助は

自笑 其積

○越鳥南枝に巢を掛け胡馬北風に嘶ふならひ生とし生けるものに故郷をしのばざるはなし

同上

○御代も泰かにさけき虎は早千里の簀入して又目出たう返り新参ぬらりくらりと出勤しられし卯辰の初春長閑にしかも明けて

同上

○金の光りにて太夫を自由にまはしても人又轢れす頑なる我儘いふ片意地な客を粹とは言はず是等を色にこなれぬ愚痴といひて戀も情も辨まへぬ金遣ひといふ者なり

風來

○小町が眉揚貴妃が唇赫奕姫が鼻筋飛燕が腰つき衣通姫の衣裳の着こなしひつくるめたる此姿

不人
詳名

○家内の暮しは乾鮭のやうな母親一人棒鱈のやうな臭いのする下女

自笑

○素人の手入れと違ひ艶顔風俗まで格別に木地の宜きを上磨きせし

其積

者なれば都の内都女美形つとくいふに及ばず世界の色をひん

同上

○富貴は悪をかくし貧は耻を顯すなり親分限なれば不孝者も隠れ

馬琴

○威勢もて逼りなば釋迦に鮮鮓をも食すべけれど彼れよりなびき隨

不人
詳名

○木を伐る者は斧をもてし娶る者は媒による送みに浮氣の轉び寐は

自笑

○八千代を結ぶ夫婦の縁親子の縁のもつれ合ひからむ岩根のさいれ

同上

○君と臣と義かなはざれば離る、事わり父子の道は天性なれば離れ

一九

○役者衆と我等が目鼻の付所かはらず指も五本あつてかたわにもわ

不人
詳名

○慾わか煩惱の犬す、げども落すうてども去らず此道ばかりはどな

自笑 其磧

○朱文公の詩に耕牛宿食なく倉鼠餘糧ありと作り玉へるもわけ暮れ田を耕やす牛はおのが力にて作れる五こくなれば食物あまるほどわ
るべき筈なれども明日食ふべき食物もありかね倉の中は住む鼠は盗
み食ひする悪き物なれども多くの米の中はかくれ居りて食物自由な
れば

一九

○若息子の色狂ひと子供の癩瘡は軽いか重いか一度の渡る川にて浮
世の瀬を越さねばならず

自笑 其磧

○夫れ一道又心身をなげうつて鍛練すればその功積つてかならず妙
あり巨勢の金岡が馬をえがけバ其馬綱をはなれて田野にかけり後藤
の何某龍を彫めば其龍水を得て虚空にのぼるといひつたへり
○善く遊ぶ者ハ溺れ善く騎る者ハ墮つ各々其好くする所を以て反つ
て自から禍ひをなすとかや

同上

一九

○吳越の人は文身とて渾身の入癩を彩り衣服の代りとするは漁獵を
常の生業として水中に世を渡る故とかや

同上

○目ばたきする間に行過るハ隙もく駒くさめする間に通り過るは月
日の關なり

自笑

○調子に乗ても物は前方にいふべし能く言課せんとして必らず虎に
角を畫いて虎にならざるの類ひ多し

馬琴

○見れば忽ち胸ふたがり泣じとすれど目又あまる涙の霑ふりはらふ
言の葉はなく唱名の南無阿彌陀佛と念じもあへを抜く手さへたる刃
の雷電消ゆるに早き玉の緒やお夏が首は撲地と落て轉ぶ軀は浮ばり
て漬る血に塗れけり

不人 詳名

○ひよつと病でもあると上げも下げもならせ荷の過ぎた三十石が淺
瀬ですはつた様になりますと問屋の手代相應の引言で

自笑

○口は禍の門舌は禍の根なりとは古への詞なるが清言清事をいふ時は萬善の根ならんや

同上

○一双の玉臂千人の枕朱唇萬客に嘗させ日毎に變る床の戯れ心にもない事を言て夫々の男の氣を取り偽りを勤めとし一生に一人の男ならでは見せぬ肌を諸人のもてあそび物になすも

風來

○或人我死して先の生は松魚になりたしと云へるを傍の人間きて何故松魚になり度きやと問へば松魚は甘き物なればなりといへるに同じ松魚も食ふてこそ味あるべけれ我れ松魚になりて人に食はれての我の甘くのあるまじ云々

同上

○清き事の青柳の初月を含むがごとく艶なることは桃花の曉煙を帯るに似たり

自笑

○奢る者久しからずといふ事は犬打つ童も知つた事で合点のしなが

其積

ら金錢ある時のあるに任して跡先の考へもなく淫酒の二ツに金錢を費やし竟に内證に穴の屋根をもふく力なきやうになつて來て目が覺てから三年遅し人の譏りもかまひず有がたい儘に世を渡る

一九

○琴を見せては佛さまのそるばんかど有がたがり石臼ひくより外の藝をしらす

馬琴

○西施が心を病るとき響みて滋々美なるが如く小町が萍を詠せしとき誘ふ水あらばと打詫るに似て

同上

○鯨寄る濱虎伏す山竹の柱に茅の軒月をあらしにわけ暮てよしや手鍋を提るともつまと呼ばれ夫どかしづき

京傳

○杖を失なひたる替者のごとく鰻にはなれたる水母の思ひをなして頼む木蔭さへ雨もり身を隠すべき所もなけれバ

同上

○生得非義を好み貪欲深く財寶を見ること蠅の血を見るが如く一命

馬琴

と失なふ事をすら寶の爲には顧みざる程の悪性ものなりしが」

○美女の醜郎を持てるハ駿馬の癡漢を乗せたるが如く又艶冶郎の醜婦を娶りたるハ朝顔の紫山子に黄縁る様にて傍ら痛く侍るめれ」

○人の名利の爲に使はるゝものからいたづらに鶴髪となつて老の後さへ静かならぬならひなるを」

同上

○羽根うつ鳥の道を定めゆきかふ魚の栖家をかへすと聞くに狸の糞所をしるべしてあるも可笑しからむや猿の腰掛はもとより猪のし、の臥所皆な其性あるもの、」

自笑 其積

○盛り立た娘の子に善い器量の若い男は見せまじき物なり狼の咽に立た骨を手を入れて扱て遣るよりは油断のならぬ物ぞかし」

一九

○しわき事水銀のごとく付合ひせざるごと固法華の他宗と交はらざるがごとし」

自笑 其積

○古人云ふ天下皆之を取ること知る事を知て之を興ふるの取ること知るなしとは立派なる話しなれども取べからざるを取り興へざるを奪ふハ則ち賊なり」

一九

○酒は鯨の百川を吸へども盡す肴はいやし坊の下戸荒せども澤山なり」

同上

○身上居開帳の如く不斷開放して家内の靈寶左りまへとなり親の譲りの田畑甘町まで揉みくちやにして彼の穴へ押込み」

同上

○鳶飛で空に舞ふ時は油揚の用心し息子浮れて青樓に通ふときは身代の用心すべし」

自笑

○身代の堤借金の淵より切れ始め住なれし家藏も貸方へ流れ込みて其身を寄すべき所もなく」

同上

○瘦坊主の齊に着たるが如く腹の中に宿なしも居るかと思ふほどの

大食追焚しても一かたけは粥にでもせざれば足らぬ位

○あなたのお頼みならば只今我等の生肝お望みあるとも胸を立割り

差上る所存

○辨慶の軍出立見るやうに兎角支度に隙を入れてかどぐちの敷居ま

たぐと其儘かけだし

○俄雨の時棺桶屋へもかけ込む人あるが如く差掛りては空しい時の

麩味物なしにて

○如何にも我等呑込山承知の濱にて鱒の取れぬ法もわれ頼まれし事

仕どげす又は置ぬ男

○名に負ふ羽生村の累に目が二ツある分にて疱瘡の時不思議に命助

かりしといふ顔付

○天道は人を殺さず人にも又真底よりの鬼もなければ世の瓢箪の川

流れ誘ふ水の萍に根はなけれどしほみもせず枯れもせざるは孫太郎の身の上

○容色未だ類ひなし梨花の白うして艶なく桃花媚ありといへども其

賤しきを如何にせん強てたどへんとするに恰も海棠の露に笑たるが

ごとく夫さへあるに

○夫れ道を修すといふ桑門徳を脩むるといふ儒者先生も富貴には傾

むくならひ況て底下の凡俗の之を貴み思ひぬはなし

○月の影玲瓏として玉ならぬ隈もなく萩桔梗刈萱女郎花尾花葛花の

たぐひの草ども今を盛りに咲亂れて露重げなる風情なるに

○具足は練物の爲す拵へたる物と心得旗は小店の木戸より始る物と

覺は軍配の金の塵を見ては金持の所のはこり拂ひと思ふ世の中

○唐土の人母を悪虎にとられ其讎を報せんと彼悪虎を覗ひしが虎に

馬琴

同上

京傳

百笑

同上

京傳

自笑

同上

同上

似たりし大石を見て弓矢を取て打つがひよつ引でひやうと放ちければ其矢すなはち巖に立て血を流せしといふも其心の信ある故一心の力弓矢に加はるしるしなり」

○窈窕たる姿見えてかげろひの如く目前にありあな淺間しどくりかへす念珠の數百八の煩惱さらに消滅せむ妄念ますく出離せざればはらくと落涙し」

○比興ものとも言はいへ籠を開いて鳥を失ないんより圈のうちの獸を屠るに如がじ」

○一度にこぼす涙の海底のしれぬ興八が心探りかねたるおすゝが思ひしぼらく時ぞ移りける」

○誰を乞ふ鳴くや梢にから衣はすてふ蟬の音を友と世を厭ふたる浪人の風雅を好む一かまへ谷の流れも水無月の空半ばなる黄昏時」

馬琴

同上

同上

同上

同上

○親子共音に泣叫びて返らぬ事を苧車の榻のはしがき搔口説き在しにかゝる面影も見はてぬ夢の心地してともにや消ん朝つゆの玉なす涙わきかへり哀傷やるかたなかりけり」

○思ひやりッ、涌かへる胸苦るしさをいえばへに岩間の清水むすばれし主の威光又せんすべもなみだ押へて立にけり」

○手煉の太刀風草葉を靡かし閃めかす白刃の光りは彼武藏野の草より出て草に入る月影の露に流る、かど怪しまれ又多磨河の稚年魚の早瀬に躍る又異ならず是彼劣り優りなく命を限りど戦ひしが」

○一子を授けてたびたまへと俯て拜し仰ひで星の光りにふる霜のしろき淨衣も氷るまで祈念丹誠を凝す事既に七日に及びしかば」

○父よ母よと鳴蓑虫の蓑屋が軒の木がらしに花も紅葉も浪花なる身のよしあしを語る、これ其縁起なり」

同 同 同 同 同

- 私も七月になりますと鰯がむか腹立たやうな腹を見すれば」
- 今ハ西明寺の雪の段跡へも先へも行かれぬ身の上どのなりける」
- 樂焼の茶碗を胡麻わへよせしやうなる顔付なりしも」
- 頭から湯氣の立つ男かけ來り」
- 誰彼の世話にて火打箱ほどの庵をしつらひ」
- 偕も氣の短かい男よくあの氣で腹に十月も居た事と眩やきッ、思へば」
- 猫に鰹節の龜の尾の灸を河童に頼んで据ゑさすが如く」
- 毒にも藥にもならず煎じ方常のごとく秀でたる働らさもなく」
- 運は天に蚊帳の質屋にありて蚊の食ふ時の用に立がたし」
- 名作の刀の疵は療治むつかし小刀疵は煙草にても直る」
- 芳原へ若い者を遣るは貧乏神の社へ願掛に遣やうなものなり」

同 同 同 同 同 同

- 分別の額口はげて正直の頭を髪結ひに任せ」
- 物身慾でかためたる血氣の若者なるに祇園の石垣は思ひも寄らむ
- 五條坂の茶屋の疊さへふみし事なく」
- たどへ眞野の長者の殞し子と自慢し大職冠鎌足公から續いた筋目
- あれはとて昔の劔今の菜刀」
- 大海へ乗出し大欲の風に身代の船を覆がへして一度に大水を飲むものぞかし」
- 同じ土なれども香爐に作られては下座にも置ず尿瓶に製せられては上に置く事なし又同じ香爐にても造り人の上手下手に依りて古くなるほど價も貴く」
- 竹取の翁が百目付けて貰ふた様な器量よし」
- 集錢出しの夜食があれば大事の用を忘れたと遊ていぬれど振舞と

同 同

さへいへば蛇の鮮でも通さず」

○雨の宮風の宮に崩れし窓に科戸の風を防ぎかねて」

○我も古しは二万反の身代であつた物と思ふは八十になる老婆が甘

二三な時は白髪もなかりしと人にあふて自慢するが如しいふて返ら

ぬ昔し沙汰思ひ出すがむだごと」

○盥から食うとて水の飲置するやうないひぶん」

○土佐書にしては美人さうなれどみつちやは數少なけれども廿七八

又て顔うちをひつぱり猿まなこ義經にして位なし」

○磯打浪のひまなきが如く漣うつ手のしげきに似たり」

○且には古きを送り夕には新らしきを迎へつゝ、寄ては返るわだ浪の

枕定めぬ憂身となる」

○靡きあふたる糸薄ひとつに落る白露に霽の緒結びぬれば」

同 同 同 同 同 同

不人
詳名

○此二手躰迷ひて身は蟬の脱がらのごとくなり命は草葉の露のやう
に消なんどす」

○蓮歩かろく移せば青柳の風になびくに異ならず」

○煩惱の山たかくして五障の雲はる、時なく愚痴の海深くして三従

の波た、ぬ間もなし」

○耳を取て鼻のわろか菟藪を積で石垣につくやうな言分」

○女郎の實と琴箱のそらぬはなきものといへども」

○空をかけらば翼を比る鳥となり地に住まば枝を連る木とならん」

○藪醫者が人參見るやうにして誰ぢやといふ」

○刃の錆は刃よりいで、刃を穢し人の不善の其身よりいで、其身を

損なふ故に君子の己れを敬む事密にして嚴なり

○生れてから母親の懐の外女の肌をしらす」

同 同 同 同 同 同

○紫の朱を奪ふを憎むは其真偽を亂る故なり賢人の佞人を遠ざくる
 其災害を恐る、故なり」
 ○勢を以て君に仕ふる者は忠なく功を以て人に交はる者の信なし」
 ○此事は犬猫にも知らさぬ大事なれども」
 ○お月様と菱餅下駄と人魂は違ふたるよし」
 ○海底の魚も天上の鳥も高けれども射つべし深けれども釣るべし獨
 り量りがたきは人の心の底ぞかし」
 ○百盃機嫌で調子高に喚きければ」
 ○逢ふ客も心に染す翻すは泪ぬらすは袖千々に苦む思ひ積つて」
 ○床入りの眞行草他所には言はぬ秘事口傳」
 ○出世をして故郷へ歸らぬは錦を着て夜行くが如しと云へり」
 ○晝飯も鹽煮のさらすか茶かすのひたしもの」

○念佛の世にも鬼があり聖人の世にも盗人あれば多き遊女の中に一
 人や二人は悪きもあらん」
 ○朱に交はれば赤らなり炭屋の男は黒らなる」
 ○馬の耳に風牛の角に蜂とやらで」
 ○是を藥罐藝と唱へて熱るも早く冷るも早しといへり」
 ○二ツに一ツの手結の返事間だるひ道行は聞入れぬ」
 ○小歌の上手張上げてうたふ一節に、梁の埃もをどつて落ぬべし」
 ○二階の客の長う短らうなつて待わぐみ」
 ○娘は男振りの氣に入らぬとて搗ぬ米食ふやうに思はれしが」
 ○こちの山印が折々遅くさいちやりを受さすには困まる」
 ○闇夜に燈火を失なひ盲人の杖を離れしごとく」
 ○老の坂の登るに時なく年の波の寄するに速かり」

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

- 薪を負て火に近づき石を抱いて淵に臨む夫よりもなほ危ふし
- 生馬の目を抜き佛の箔をも剥すといふ諸平なれば
- 畫ける餅を見て餓を忍ぶがごとく互みに言寄る便宜なく
- 蟬を窺ふ螳螂あり螳螂を狙ふ黄雀あり黄雀を撃んとする彈丸あり
- 人の心は脆きものにて善に進めば善に移り惡に進めば惡に移る譬へば水の器に隨ふに異ならず
- 何れの日を限りともせず雲をにぎり水をつかむ思ひをなして百折千磨の辛苦を厭はず
- 角ある者の牙なし牙あるもの角なきが自然の道理なり
- 畫にかいた西行も富士山がないと鉢坊主どほか見ぬぬやうなもの
- 戯談も下段も致しませぬ
- 亭主の横スツポウでも張りろねぬのが取りえでも何でもござらぬ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

- 頓着は生薬屋巾着の腰へ提げると思ひなせ
- つひに齒の掃除もせぬ口から鼠色の涎を流して嬉しがら
- どこでも愛想をつかさねぬ氣だから貸されぬとはよく言ふ事なり
- 然のみそいで捨るほどの生れ付でもなければ
- 一ト問答がして見たいと鼻に油を乗せて云へば
- 蛇の目を灰汁で洗ふたやうにさつぱりと
- 八寸組のうら迄見ぬく某
- 十二の階子を十一まで登つた處をさても悲しや
- 一言二言難問しても鯨が鯨呑むやうに舌動一遍にやりこむれば
- 今茲二八の其姿妃已も尾を見せ照君も空書をたのむ
- 相生傘の落書に借老を語らひ糠味噌桶に凭れて同穴を契り
- 空腹に鱧の茶漬食ふやうに何も彼も甘い手都合

○澁紙の化物見るやうな船頭一人

○家内犬猫ともに三十八餘り貳疋の暮し

○久し獅子のあんかけ以來打たへて出會ませぬ

○是にて今日も翌日も覺めはて一座白けて見えければ

○互ひに曰くのある顔付我等が目水晶はぐらかさうとは大佛の鼻毛

太いといふもの何と狐に茶碗で拷問しやうと

○龍宮を親類に持ちて魚店出したやうなもの只取りぢや

○人は眉目より只心と言ふ誠なるかな姿の花の散り易く心の花は死

すまで散らす

○三ッ蒲團の上に箔の付かざる濕襪像の如く夫と往生しながらも

○言合せの狂言最ちつと淺黄の頭巾扱がずに居やうと思ひ

○義理を欠く事茶漬飯のごとく思ひ遊興をバ疫病神の如く嫌らい商

賣に至りては

○三間梯子掛て登り詰め野干の大番振舞にのわらねと揚詰となして

晝夜を分たず

○鼻の下を童子格子となし金銀の權兵衛が種蒔くやうにばつばと蒔

散し

○親父の熊鷹眼番頭のどんぐり目人に勝れて大眼なればその目を抜

く事生馬の目よりもかたく火急の事に覺束なし

○口から出しだい滅方彌八と言慰さめ

○俄かに文珠菩薩を祈れども三文の智慧も出ず日蓮尊者をしたへど

も金工面する通力も空しければ

○簸醫者の悔みに來て洒落廻るよりも面にく、

○天人からつり取るほどの美人

同 同 同 同 同 同

○長吉一代の思ふきやう其金四五日貸て呉れ頼むといへば」
 ○釜の中に友を追ふ魚俎の上に餌を拾ふ鳥に似たリア、危ひかな危ひかも」
 ○流行は一圓廓に添ふて人を追て走るが如し先んずる者頼て後れたる者を追ふに似たり」
 ○彼の六宮三千の佳人の顔色なからしめたる揚家の女にも耻ざるべき羞花閉月の容色は遠山の黛丹花の唇」
 ○雲の龍に従ひ風は虎に従ふとて明君と賢臣と一時に出會ふ事世にありがたき事どもなり」
 ○あからさまには岩橋の言はぬ云ふにいや増る思ひとこそは知られさり」
 ○みすぢのいと苦しくも人の門邊にたち劍さやけき月のいふせき

同 同 同 同 同 同

までに」
 ○誓ひし事をいへば之に岩手のつ、と冬枯る下枝の落葉色見ぬてかき口説かれぬなげきなり」
 ○始めて知れど今更に名告るよすがもかく鹿の秋ならなくも露けき袖をしぼりかねツ、伏沈む」
 ○朝寐の朝飯のいらぬ助けと思ひ晝遊びは世界を長うくらす徳など、考へを付け」
 ○類焼に逢ふた普請中大工に釘拾ふて貰ふやうな物じやと」
 ○斯な事ふつ、りと思ひきりぐすど舌うち散して歸る事ハ度々あり」
 ○親の薬の甘さは忽ち本の病ひを惹出し慈悲心却つて惡念の肥料となるどの譬にひとしく」
 ○金銀の人の身を助くるの最上にして又亡ぼすの根元どかや」

同 同

○年光の止まらざる事奔箭下流の水のごとく
○哀樂互ひにかはる事紅葉落花の樹に似たり只世の中の有様を夢と
や云はんうつゝ、とやいふべき」

同 同

○五十年振りには小便せし慮生が夢の半分廿四年の榮花の春も過ぎ」
○よる年浪の淵瀬より深き思ひは只之のみ今茲もあだにくれ竹のよ
そちを過て持たぬ子の」

同 同 同

○亂れたる世のうたかたの粟座鳥も翌の又我上をこそなくならめ」
○奸佞の面野狐のごとく貪慾れ眼鼻雕に類し相貌極めて兇惡なり」
○その生涯をあやまたげ磨きし玉を泥に擲ち作りし枝を折にも劣れ
り今その腐れの淺きうち其毒を削らずば竟に腹心の病とならん」

同 同

○無常を示す早桶は魂魄こゝにあら佛」
○胸をさき臍をくらふとも飽たらず」

同

○ひくにてに靡くはたす、き情の色もほにいでそむる折なるに」

半二
文吉

◎附り 院本妙文

○戀情爰を瀬にせん蜺川流る、水も行通ふ人も音せぬ丑満の空も十
五夜月冴えて光りの暗き門燈灯大和屋傳兵衛と一字書眠りがちなる
撃柝に番太が足どり千鳥足ごよぎくも聲更けたり」

同上

○妓が情けの底深きこれかや戀の大海を替も干されぬ蜺川思ひく
の思ひ唄心が心留むるは門行燈の文字が關浮かれぞめきの仇淨るり
役者物真似ないや唄二階座敷の三味線にひかれて立寄る客もあり紋
日通れて顔隠し仕過しせじと忍び風仲居のきよが之を見て三保の谷
が着たりける頭巾の鏝を取外しく二三度遊のびたれども思ふお客
なれば通さじと飛掛りひつたり悪戯れごんせと止めたる女景清鏝と
頭巾ッヒふみ冠る客もあり橋の名さへも梅櫻花を摘へし其中に南の

風呂の浴衣より今この新地に戀衣紀の國屋の小春と此十月に仇し
名を世に残せどしるしかや今宵誰か呼子鳥覺束なくも行燈の影
往違ふ妓が立歸り

宗輔

○世にあらば又歸り來ん津の國の御影の松と詠置し一ト木と共に年
を經し額の黒子口ぐせ又佛の御名を唱ふれば白毫の彌陀六と人に知
られし石屋あり實に交りも信心の同氣同行相求む朝暮勤むる看經の
責念佛の終りには諸國諸山に達置し石塔にある戒名の數も限りもな
むあみだ願以此功德平等の回向の聲も殊勝なり

同上

○行く空もいつかは冴ん須磨の月平家の八嶋の浪に漂よひ源氏の花
の盛りを見る中に隠れし熊谷が陣所須磨に一ト構へ要害嚴しき鹿
角岩の中に若木の花盛り八重九重も及びなき夫かあらぬか人毎に熊
谷櫻といふぞかし花折らせじとの制札を讀で行く人讀めぬ人一ツ處

に立集り

同上

○手負の今ぞ此世の名残り花や今宵の散櫻妹の一人親兄の別れを胸
に八重櫻姫は紀念の言の葉に結ぶ心の糸櫻跡に老木の姥櫻涙の雨や
小夜嵐生死不定の世の中の不斷櫻と諫めても尽ぬ名残の山櫻ちりり

案山子

○我戀の松を時雨の染かねてと慈鎮和尚が言葉の種眞葛ヶ原の片は
どり風爐に常釜かけ床几茶代一服一錢が店は風雅の捨せころ圓山戻
り色酒の酔を醒しに来る客の中に目じゆんだ重羽二重見かけは作れ
ど懐中の薄茶飲みぬる茶筌逆に立花桂庵とて魁より口のよう廻る
判官好みの辨慶醫者しかつべらしく茶碗さし置き

同上

○心を汲取るかいげ杓是や末期の水盃冥土の旅へ嫁入の儀式をまね
ぶ三々九度苦しき中にも莞爾と笑顔は娑婆の色直し雪の白髪の尉な

同上

らで姥もあへなく介添の彌陀の淨土へ犬張子血汐の紅に染てやる野邊の送り火消果し草葉の露の玉の興あはれ果敢なき契りなり」

五十六

同上

○武士の八十宇治川と名に流れ底の濁りも夏川や水の縁も涼しげに風吹渡る宇治橋の往來も繋ぎ五月をる螢狩りにと來る人の足休めやら氣はうじの花香の愛か一ト森や貴賤老若差別なくたぎる茶釜の湯氣に立つ名さへ出花の通圓が店は人絶なかりけり」

同上

○船は次第に遠ざかる這は何とせん彼とせんとあせる機會に阿曾次郎が船へ投込む扇の別れ跡しら浪と隔の船繋がぬ縁ぞ是非もなき」
○素見ぞめきでむく鳥が群つ、木つ、き格子先た、く水鶏の口まめ鳥がチ、些ども囀づるまいどの春霞謠ふ聲々浮立て誰哉行燈の影光る戀の情の仲の丁別けて榮ゆる松葉屋の座敷の絹でふき磨き目を驚かすばかりなり」

半二

○比良の暮雪と賞せしも誠の寒き暮の雪冬ぞ淋しき大津の浦に世を漕ぎ渡る船長の妻も共々外かせぎ内は十五の涎くり」

同上

○其源は近江路の比叡山下し隔てられ便堅田の雁絶て武士の義は石山や月の弓張矢叫びの矢橋の歸帆陣幕も閃めく比良の陣館」

出雲

○所の名さへ醒が井と言へど朝夕酔伏て酒手に諸式諸道具まで酒家へ昇出す駕籠身あり名は四斗兵衛が内一ばいふんぞり返る高枕」
○黄鳥の宿のと問へば梅の花それは軒端の花盛り此處は所も誓願寺佛の比願新なる春を迎へて咲く梅の花見がてらに參詣の引きもちぎらぬ其中に養清院のお傍臥皆の方の女御とて」

同上

○青柳に早月の雨を織交て流る、水の堅抜や影衣洗ふ川風に裾吹卷る女中連花塗足駄長柄の傘掩へど戀の花芒女郎花の姫君は過し詞の契りより深くぞ思ひ頼風の風の便りも懐しく腰元ばかりお供にて態

五十七

と姿も町風に軽い取なり忍べども御所は御所なり縫物の糸推高く見

え玉ふ

不人 詳名

○物騒がしき戦場は何時太平を湖に今ぞ生死の追分や追つ追はれつ

阿契

馳違ふ矢橋の浪の磯端に登り下りのたび人を乗せて商なふ渡船守

○祇の園感神院の鳥居筋下河原の片陰又歌占を看板も女の手業な

同上

まめいた色紙短冊糸に寄る物ならなくに我人の願ひをさすが神子な

らぬ神の園生に住めばとてお園くど名も高し

同上

○玉敷く庭の自から夏も涼しと夕顔の光る源氏の黄昏や夫は五條の

軒端吹く爰は二條の室町に義輝公の奥御殿晝夜を分ぬ酒宴の興日も

関と知られけり

○蘆火焚くなる難波にも住めば住むなり住吉の街道筋の離れ庵本家

是濟和中散價は一ふく十貳錢買ふて去ぬれば又跡へ買ひ又岸野の所

不人 詳名

がら店も美麗な構へなり

○女肌には白無垢や上に紫藤の紋中着紗綾に黒縞子の帯年は十七初

花の雨に潤る、立姿男も肌は白小袖にて黒き綸子に色淺黄うら甘一

五の色盛りをば戀といふ字に身を捨小舟何處へ取付く嶋とてもなし

鳥部の山、其方ぞと死に行く身の後ろ髪ひく三味せんは祇園町茶屋

の山衆が色酒に亂れて遊ぶ騒ぎ合ひアノ面白さを見る時は染どのそ

なたと何某が去年の初秋七夕の座敷踊りをかこつけて忍び逢ふたこ

と思ひ出す

同上

○七重八重今日九重に匂ひぬる花の都の川東祇園の社年経りて和光

の影も著るく参り下向の人群集嘶万歳居合拔永當く諸見世物實に

繁昌の靈地なり

○往昔より爰に和泉の神垣や信田の郷の年古りて塵に交はる宮柱和

出雲

同上

半二

同上

同上

不人
詳名

光の影も明らけき是も神の誓ひとてつきく迄も當世の加賀菅笠を
一様に鄙に目かれぬどりなりの葛葉姫と聞えし信田の庄司が深窓
又人と成りたる秘藏娘心に深き立願の徒路ひろふて神詣で千早振袖
襦袢も都に稀な風姿態花も色にや耻ぬらん

○別る、袂濡るは袖引かる、心離れぬ恩愛婿よ我子よ嫁娘と昨夜の
呼ばれ曉天は露と消行く魂よばひ輪廻流轉の空啼れて清き最期は一
念不生迷いぬ道は即心即佛菩提の道に入る夫婦姫を誘なひ行く夫婦
孝行忠義ニタ筋を一ツ血筋に結ばれし親子の別れぞ哀れなる
○秋の末より信濃路は野山も家も降り埋む雪の中なる白髪の雪女な
がらも故あつて男のすなる名を名告る山本勘助と人毎に岩間の水の
音絶えて木の葉の研ニツ三ツ空もいたいけ幼子を賺すお種が手枕に
ねんねが守りは何處へ往た山の薪をエイサツ、さらば爰等で一と休

み

○死は武士の常どとは常の詞と思ひ子に今ぞ懸れる甲斐の國武田入
道信玄と身は釋門に入りながら武門花咲く庭の面落葉角助はく兵衛
が引ずる箒うち水にいと館のしめやかなり

○其常盤井に濡衣が暇すも涙にて物のあやめもなき良人に似たる
菖蒲や杜若花紫の明方は盛りと見えし朝顔も今は名のみぞ勝頼の御
手へ頓て鳥かぶと花にもなせし悪業のありて其名は鬼あざみ因果は
巡る向日葵に法の此身を絶入る兵部不便と見やる信玄は仁あり智わ
る勝頼に名殘奥方女郎花桔梗刈萱秋の野の月に尙ふる更科や信濃路
さして出て行く

○百万石の入込に住む所さへ長町と淨留里本にもうた方の水の流れ
の行末を皆打寄る安治川や三文割木割松まで何から難波の村外れ世

界外れの非人ども爰を時の日暮前役者名寄せ手鞠歌本は上下壹冊が

六文大芝居始まりく

同上

○鷹は水に入て藝なく鵜は山に在て能なし筋目ある武士も世事には疎き町住居削る楊枝も細資本辛苦黒もじ身すぎ楊枝商賣磨き楊枝の

看板猿も喰いねど高楊枝浪人どこぞ知られたり

衛門
門左

○仙家の日月本長閑なり臘を送り春を逐ふ豈又然らんや聖王自から長生殿にましませば蓬萊王母が家に向々たらすとは是此時のすべら

ぎや五十餘りの代々の君天のなせる賢王地に報せる明君と都て仰がぬ限もなし

同上

○奉公する身の始めより氣が弱ふてはなら阪や春日の祇宣の妻なるが夫は社の宮司の其すきくの骨仕事家内五人の朝夕や勸進能の地謡に雇はれ戻る留守のうち暮しかねたる春の日の幽かな世を経る中

一風

々に妹春わりなき習ひとて子ハ三人目でさふらへども父は今でも籠の糸ながふ御縁もあれかしと莞爾と笑ふてやける

○葵の花ハ日を見て轉じ芭蕉は雷を聞いて開き目なうして時を知る况んや明君機に臨み變に應じて民を撫で難苦を憐れみ世を富す恵みめぐれる國人の

同上

○江の島の神に願ひを掛巻も畏こき國の守りどて民の願ひは様々の筆に尽して繪に寫し繪馬の數々掛け並べ狩野の筆やら土佐の筆流れを繪師が細工がぎ其品々は言れねど武家の願ひハ鏑矢を板に狭みて弓勢をおしむ鴛鴦夫婦中替らぬ松の若緑り子を持つ人は小夜更て夜なき嚇しの鬼女の假面お乳の願ひは乳を出して絞る所を書き記し己が願ひの品々を繪に寫すも江の嶋と名付しものと疑はる

衛門
門左

○硯の命ハ靜に動らぬを以て世と共に長く筆は銳に動くが故に命毛

同上

日を以てかぞふと云へり
○一夜あれく帯買ふて遣るぞ帯じや名が立つ正でたもれッレ嫁入
さしよとて長持買ひに柱曆が百度出る晩かあすかの里も賑はふ麥秋
の麥搗唄の喉揃へ皆麥わらに腰掛けて煙管啜へて休みけり

文耕堂

○春百花あり秋月あり戀に怨あり情あり榮かなるつもの、枕、爛かなる
錦の衾我ひとり且を思ふとは日本唐土押あべて夫を慕ふ戀草の種蒔
きそめて日の本の神代の法の道すぐに御代を傳へて五十六代清和天
皇のしろし召す國を常世と榮えける

冠松
洛子

○逆も遊ばい大きな遊びに手放した富士のお山を都の中へ取寄せて
麓で祇園の大涼み大阪の舟で三味ひき琴ひき太鼓打ちつとんとつと
んつ、てんくくわんくくのぐわんとさ名にし負ふ四條の涼み大騒
ぎ江戸大阪の座敷がり尻も据らぬ先斗町細手川端石垣の二階と下に

同上

○吉凶の身は世に連れて與之助の乳母が在所の沓掛村草履取の一平
も廻りくくて親里へ戻り馬の八藏と變る渡世も口どはき伊勢道中を
一またげ稼ぐ足さへ繫がれし母の病に働さやめ馬の沓打ち草鞋もい
ざり仕事の撮み錢煙りも立ぬ貧家の軒其日過ぎとぞ見ぬにける

不人
詳名

○東路を登り下りの旅人も二ツと三ツに追分や大津に並ぶ旅籠やの
棟門多きその中に名高き關の清水屋が疾より奥に客泊めて料理拵ら
へ粗板の音もてきく亭主の氣配下女も男も夫々に茶運ふ風呂焚く
人泊る門賑はしき黄昏時アラ尊導びき玉へ觀世音運ふ歩行の順禮姿
脊に國名を笈摺るの年は六十路に色黒き達者作りの老人が

菅專助

○難波津に咲や此花冬空も貴賤群集し色々の願ひも満る神の御社尊

さは門から連歌所繪馬堂廣い境内大阪に並ぶ方なき御繁昌五ツも七ツも三文字屋の聲に紀の國松柑酒上爛ほつこり田樂茶屋櫛笄煙草入數々七味清氣散合す勘定十露盤算積り細工の小見世物歌舞伎操糸がらくりの繪看板覗けば聲色輕口の舌は三寸齒は手拍子ぬくは居合の太刀風も納まる御代の例なり」

同上

○此間大阪町々で御評判の高い色事此邊りで大きな聲ではサされぬ事一人娘と子飼の丁稚しめて寐油しんとどろり節は即ち祭文口説上下に致し綴本が六文大きな聲では言れぬ事といふも高聲町々の物騒がしき大三十日質店の帳箱を盧生が枕肝膽を碎く久松思ひ寐の夢驚かす初夜の鐘フット目覺し」
○蒼々たる姑射の松化して綽約の美人と顯われ珊瑚たる羅浮の梅夢に清麗の佳人となる皆是れ擬議して變化をなす豈誠の木精ならんや

出雲

同上

唐土ばかりか日の本にも人を以て名付るに松と呼び梅と云ひ或ひは櫻に准ふれば花にも心天満る大自在天神の御自愛ありし御神詠末世に傳へて難有し」

○イヤ、是は我子にわらず菅秀才の亡骸を御供申す何れもは門火と門火を頼み頼まる、御臺若君諸共にしやくり上たる御涙冥土の旅へ寺入の師匠の彌陀佛釋迦牟尼佛六道能化の弟子に成りさいの河原で砂手本いろは書く子を敢なくもちりぬる命せひもなや翌のよたれか添乳せんらむらむらめ見る親心釵と死出のやまけこえあさきめみし心地して跡は門火にゑひもせず京は故郷と立別れ鳥邊野さして連歸る」

同上

○可惜若者殺せしと悔む夫婦も聞く親も八重も死なれぬ身の線言是非も涙に南無阿彌陀佛と鐘打ち納め撞木と替る杖と笠白太夫は片時

も早く菅相蒸の御跡慕ひ島へ赴く現世の旅立櫻丸が魂魄は未來へ旅
立この亡骸梅王夫婦を頼むぞ八重が事までつとに頼む言葉の
置土産迷途の土産は只念佛南無阿彌陀佛くく南無阿彌陀佛く
南無阿彌陀佛打冠り西へ行く足十萬億土亡骸送る親送る生ての
忠義死したる義臣一樹は枯し無常の櫻殘る二樹は松王梅王三ツ子の
親が住どころ末世に夫と白太夫佐太の社の舊跡も神の恵みと知られ
ける

不人
詳名

同上

○冥土へ遣るには何研が宜からふ胴切が宜らうか梨割にしやうか蓮
切も面白待よ初太刀のは袈裟切二の太刀に極樂參り佛になれと拜
み討直に跨がり止息の刀抉り苦しき四苦八苦虚空を掴み無念の最期
哀れといふも餘りあり
○實に夫よ口で言はれぬ心の丈豫て認め奥山の鹿の卷筆封じぶみ戀

同上

し小石に括り付け女の念の通せよと
○若戸隠れし神様は誰と寐々して常闇の夜々むとに通ひては又歸る
さの道もせ來もせ

同

○鳥に似たる蝙蝠あり魚に似たる蛙兒あり形は人に似たれども奸曲
邪癖の倭臣の心は闇き夕暗に

同

○浪人者と覺しきが古大小の柄糸も綻れ亂れし破小袖摺違ひさま振
返り

同

○莞爾と笑顔も見せむ一言の挨拶もなく懷中で錢よむやうに儲々俯
向てばかり首筋が痛みは致さぬか

菅專助

○世の中は米饅頭や風味よき煙草市村二階建さわぐ三味線流行歌ぞ
めく悪口途絶なく人通り筋柵屋の軒端はそれと人目立位も松の作ら
ねど自からなる花の笑華美を隠せし當世の姿もしやんと長柄傘戻り

同上

掛りし門口の暖簾をぬつと手代の傳九郎

○大日本は神の國八百萬屋の優男すゝと粹どが揉合ふて紙子又其名揚卷の樽よしあし難波瀉身を尽したる戀話し短かき筋にかくばかり

○花の都の清水寺爰に寫して有栖山三筋の瀧はあらねども弾く三味

線の瀧呑に散す山吹身を捨て浮む瀬幾瀬君が爲め命も身上も取て往

け飲めや唄へど賑はしき新清水の坂の下

○算盤片手に帳引寄せ二一天作の五九進が三進六進が二進七八五十

六になる伯母打連れて孫右衛門内に入れバ

○未來の爲に願ふた後生現世の願ひに打込で死では奈落に沈むとも

此場の難儀を救ふてたべと

○春に先立つ冬梅の雪を穿ちて芳しく夫に後る、仇し身は後家とて

同

不人
詳名

半二

同上

同

同

同

出雲

同上

立る家もなく流れ渡りの水馴棹世の憂節を一人して筆にかきッ、隅

田川離れし本夫の彼岸へ到るは弘誓の渡し舟

○と言ふより早く小柄の手裏劔規ひは松ヶ枝トツサリと落る軍八抜

討に肩先ばらり大袈裟切ホ、天晴れ美事

○エ、マアコレ一寸おじやいのど無理に手を取る笹栗の我から落て

草の露濡れに行く身を割なけれ

○遠慮會釋もあら磯の浪に揉まる、村千鳥雲井をよそにしほくと

月日に蝕のト曇り苦々しくも哀れなり

○佳肴ありと雖ども食せざれば其味ひを知らずとは國治つてよき武

士の忠も武勇も隠る、にたとへば星の晝見えす夜は亂れて顯はる、

例を爰に假名書の太平の代の政事

○鷹は死しても穂は積ますと譬に洩す入る月や日敷も積る山崎の邊

衛門
門左

同上

同上

に近き詫住居早野勘平若氣の誤り世渡る望性細道傳ひ此山中の鹿猿
 を打て商ふ種が島も用意に持や袂まで鉄砲雨のしだらてん誰水無月
 と白雨の晴間を爰に松の陰向ふより來る小提灯是も昔時の弓張の灯
 火消さじ濡さじと合羽の裾に大雨を凌いで急ぐ夜の道」
 ○別を天外にもとむれば蜀山の雲終にへだ、り魂を地下に尋ぬれば
 巴陵の水轉た流れて止まらぬ世を其昔に返さんと」
 ○とつ國や隅田河原の邊りに近き垣生の住居夫婦も本は都鳥有か無
 きかのかせ世帯妻の手づまの賃仕事お櫛取る間もなければも浮世の
 垢の落かねてのり立もせぬ世渡りの憂身にどんと筆捨てはりて綴り
 の色紙短冊歌人に似たる譬へ草夫は言葉を巧みにして善き衣着たる
 商人のゐるが中にも人商人」
 ○籠の中の鸚鵡檻内に随つて臥仰ぎ臍を窺つて蹴蹴す紺の足丹き紫

同上

縁の衣翠き襟金精の妙質火徳の明揮辨才聰明にして能く言ふ靈鳥何
 んど時の賢さに逢へる放れたる臣棄られたる妻懷を爰に同じうす」
 ○此嶋は鬼界が嶋と聞くなれば鬼ある所にて今生よりの冥土なり假
 令如何なる鬼なりと此哀れみをなご知らざらん此嶋の鳥獸も鳴の
 我を訪やらん昔し語るも忍ぶにも都に似たる物とての空に月日の影
 ばかり花の本草も稀なれば耕し植ん五ツのたなつ物もなくせめて命
 を繋げどや嶺より硫黄の燃出るを釣人の魚にかへ波のあらめや干瀉
 の貝みる目に掛る露の身は憔悴枯槁の九十九髪肩に木の葉の襤褸さ
 せてふ虫の音も枯木の杖によるくよるくよる今胡狄の一足と歎
 ちしも俊寛が身にしら雪の積るを冬消るを夏風の景氣を曆にて春ぞ
 秋ぞと手を屈れば凡そ日數は三年の言問ふ物ハ沖津波磯山下し濱衛
 涙を添て故郷へ何時廻り行く小車の轍の鮎の水を乞ふ憂目も中々に

比べ苦しき身の果の命待つ間ぞ哀れなる

○卒屠婆を取て押戴かす教への詞の報恩謝運る月日は車の榻戀の通
ひ路深草の九十九夜まで肌觸れぬ可惜姿を關寺の芝の庵の百歳に卒

屠婆小町の身の果も思ひ知られて哀れなり

同

○ヤア面白の四季の詠めや春の上野の花盛り雲の陽炎兩國の涼みの

花火星降り秋は賑はふ御殿山山王堤に降積る雪の景色も面白や音頭
を囃す三味太鼓手振揃への花笠やらざす姿の花紅葉

同

○大身小身とやらソリヤモウ言ふに及ばぬ雉子と鷹その鷹でも時又
寄ると斑鳩にも捕らる雉子めは又蛇に體を巻かして羽叩きし微塵に

碎いて餌食にする

同

○式臺の枕詞の数々や倭詞の其中に思ひの露と書きたるハ涙と言は
ん御所詞其言の葉も今ぞ此身を知る雨は

同同

○解て侮しき緞田帯長かれどこそ祝ひし短かき親子が契りやど

○長上下も踏したぎ伊達拵らへの大小も道が無骨の荒くれ男目禮式
禮悠々と上座に動手と押直り

同

○伏拜む手に降る涙何といはでの苔の露曇らぬ底の水鏡磨き逢ふて
ぞ入にける

同

○夕の雲朝の雨と誓ひし言も楚王の夢墓なき浮世形なき此身の上
と計りにて思はず結ぶ露時雨

同

○梅や櫻と見れども散らで甲斐なき袖の露やつせばやつす菊の前
昔は雲井の月に愛で今は憂身を川竹の流れに染める華美衣裳お林の

花車に身を變て赤前垂の紅も顔の紅葉と照添て他目を包む廓詞

○此方は何も白川夜船磯にも陸にも付は無是では行ぬと拵取直し

○摺んだ物落す鷺と算者のべ違ひ弘法も筆の誤り猿も木から只今落

ましろ

同 同

○見るから凄き面魂ひ直ぐには行ぬ蘆合船櫓を押返る我家のかど

○母も涙の霰釜自在の竹の千代迄も柄杓の柄にし長かれと親の思ひ

の蓋置も明けて言はれぬ数々の尽ぬ泉の水こぼし夜食に花は生ねど

も老の手前ぞ花香なる

同

○善と悪とに奈良阪や兒手柏の二面見分ぬ夜の道ならぬ本夫もお園

が身の縁し一樹一河も並ならぬ他生の縁に月日をも松原暗き臙夜を

打連れてこそ立歸る

同

○昨日今日の様なれど花の盛りも散過て卯の花青葉杜鵑指打ちかぞ

同 同

へばハヤ五月

○鉄扉押ゆる八寸釘裏打返す詞もなくしよげに成るこそ心地よき

○思ひの跡に老が身の目さへ涙に春椿夏の榎に秋楸冬は柀の年越え

同

て躰て出世を公は松千代萬代の後までも手習ふ子供の翫ぶ歌字尽し

同

のうたかたも哀れなる世の物語

同

○互ひに心有磯海深き思ひの底に生みみるめ包めと戀風に浪打寄せ

同

たき風情なり

同

○お姫様のお心の三浦の方へ走り船ひよんな事は状文の櫓でも櫓で

同 同

も行悪い荒磯の岩侍ひ

同

○遣じと追て行くふとじり逃る出尻に桂庵も腹を抱へてハ、ハ、ハ、

同

○どうぞ此身を何處へも連て退て給はれどひとつたり抱き月の夜の影

同

も隔てぬ比翼鳥放れがたなき風情なり

菅專助

同上

○身代も今を日の出と東堀深い戀路の種油絞り出したる錢銀も鬢付

光る油屋の惣領息子の多三郎多の字を讀ど方々又惚人の多い男振

○あいと返事は仕ながら心も愛に沖の船裾もほらく走り行く斯

とは白髪白梅の折知り顔に咲く花を手折て來鳴く鶯の鳴音の月日干
燕年頭歳暮の禮を兼ね一荷に荷ふ藁舂は久松が親野崎の久作

同上

○戀情千話や口舌や手管の諸譯覺えた數の万屋の色取息子助六と廣
い難波に最一人と在原風の花奢姿

同上

○引立らる、憂さつらさ冬編笠のわかばりて紙子の火うち膝の皿笠
吹き凌ぐ忍ぶ草死なふとすれど古への花も散行く入相の鐘に哀れの

同上

數そへて泣が心の暇を別れてこそ立歸る
○渦巻く浪の彼邊這邊とながめつ、此世の緑し淺き瀬に寄りては消

同上

るうたかたのわはや捨身と見ぬければ
○顔回ハ早く夭して終に四十の花を見ず盜石は壽長して既に八十の

衛門
門左

霜をふむ生死不定の理りは上智博識も辨すべからずとや
○名所は音に響の灘かねが岬に明渡る箱崎の松さいふの梅末は芦屋

同上

の浦づたひ海士の漁火影もなく松吹く風の聲ばかり今行く船に通ひ
來る苦よりくいる滴りの小倉の雨の糸に似て波も縮みや織るらんと
心を結ぶ中空に初雁金の雲間よりちらくく散し書誰が玉章の文
字が關めかりの明神伏拜み潮の満干の玉嶋に續く光りや茜さす周防
灘どり是かどよ濡れた姿のあの姫島に誰か思惑の緑りぞと沖のかぶ
るに言問へば灘の男浪が打寄せていつも添寐の床の鳴京どまりてハ
上の關翌日の花洛も程近くあふと御手鹽くる、嶋右手は四國の海づ
らを走る兎の月を越ゆる暮ては明る日の鳥廣々たる和田の原嶋々浦々
幾湊風に任せ艦に任せ船は備後のしきな浦潮待してこそ到ける
○さまと寐る夜ハ胡麻殻焚やる夜がなよつびとばちく焚やる苗代
過の堤畑噺が口々小歌節在所驚敷醫者の藥箱持つ懐に人の命を助け
ぬ専我方寸の匙加減

同上

○今日も又能き日和なり住吉の岸の姫松客を待つ打明茶屋の店に釣
る蛸の足早々飛脚跡にのた〜牛を曳く百姓賣人入違ふ堺の魚荷腥
い出家侍犬拾ひ吼付き吸付く女郎連味い〜氣疎う味いけんけら糖
お茶わがつてお出ぬかお休みなされと尻張に長う挽がら煙草の火ち
よと借やす過分など唾へ煙管も遠慮なき在郷街道賑はしき實に大阪
の通ひなり

同上

○國々の金打寄る大湊何商賣も大阪の内本町に家久しき平野屋の久
右衛門老てい後生一遍の念佛三味算用は噂のお鉄がいらくらと女の
性の罪深き五障三從醬油の通ひ改め闇がしき

爲永

○花の盛りは江口の里に苦界する身も何時となく儘になりしを夫も
ゑに又も憂身に奈良阪や木辻の里に咲かゆる二度の勤めも自づから
馴れし昔の八文字草の露踏む玉鉤も柳櫻に梅が香を移す姿は花街に

出雲

もならひ名取の花ならん
○一の關の新廓都を寫す揚屋町身に染む風の酔覺時柳が招く禿が送
るさらば垣軒に呷やく局にひざる間夫が中戸の摺み合泣て別れる色
あればおだて、去ぬる親父あり戀路の闇の闇の夜もくらがり知らぬ
里どかし

半二

○浮世渡りの數々に古巢を組し鳥羽の里藁屋の軒の詫住居娘お蘭が
賃仕事ぶんぶ綿操くる〜と糸より細き瘦世帯稼に暇なかりけり
○菩提本是植木にて塵埃本臺にあり不立文字の心法を我日の本に受
繼し大徳一休大禪師其古への天台の我立柳を立出て爰も都に綴喜の
郡報思庵どの名計りに蔦に埋る、破れ屋根時雨も月も漏り次第椽の
怪き觸體に燈火點じ終夜白骨觀の寂莫たる凡慮を放れし住家なり
小説文範大尾

同上

明治廿一年十一月五日印刷
同年同月八日出版

(定價 金拾五錢)

大阪府西區京町堀通貳丁目廿貳番地

編纂兼發行者 吉田伊太郎

大阪東區北濱貳丁目六番地

印刷者 阪部清二郎

大阪西區京町堀通貳丁目

發賣所 大華堂

版權所有

●栗原亮一君 序文 ●角藤定憲君 著述
●森健吉君

小說 幽暗之書

正價 金拾六錢
郵稅 金六錢

近時小説の出版多し然れども其見るべきものは甚だ少なし此書は角藤定憲君が小説改良の主意に基き絶妙の意匠と壯快の文章とを以て書生立志の顛末を最も面白く最も愉快に述べられたる新著にして書中才子の困難あり美人の義舉及び情話あり料亭の奇遇あり下宿屋の滑稽あり樓主の異見の能く花柳社會の狀態を穿ち紳士の奇計の巧みに節妓の心神を驚喜せしむ而して剛膽の書生が志を達して故山を望むの終局まで奇想百出文言自在真に近世傑出の良著に付續々御愛求且御高評の程を願上候也

大阪西區京町堀通貳丁目

大華堂主人謹白

府 下 大 賣 捌 所

心齋橋筋本町東～入
 同南久太郎町南～入
 心齋橋北詰
 同
 同順慶町南～入
 同安堂寺町南～入
 同久寶寺町北～入
 同備後町南～入
 同
 同
 同北久太郎町角
 同備後町北～入
 同順慶町北～入
 同
 同博勞町南～入

岡嶋 眞七
 安井 兵助
 駿々 堂
 競 争 屋
 兎屋 支店
 青木 嵩山堂
 寶文 館
 此村 彦助
 吉岡 平助
 積善 館
 小谷 卯三郎
 柳原 喜兵衛
 梅原 龜七
 此村 庄助
 田中 恒太郎
 中川 勘助

心齋橋筋本町北～入
 同安堂寺町南～入
 同鹽町北～入
 同南久太郎町東～入
 同久寶寺町角
 同南久太郎町南～入
 同備後町東～入
 南本町三休橋西～入
 心齋橋南壹丁目
 京町堀五丁目
 同 四丁目
 高麗橋浪花橋角
 平野町心齋橋東
 東京日本橋區橋町四丁目
 同本町壹丁目七番地
 京都寺町松原下ル

赤志 忠七
 田中 太右衛門
 柏原 政次郎
 武田 福藏
 三木 佐助
 中島 德兵衛
 博文 分社
 大辻 増五郎
 松村 九兵衛
 平野 藤七
 吉東 書店
 田中 萬助
 黒田 書店
 鶴 聲 社
 東京 屋
 改 進 堂

